

2018 年度 立命館第 1 回スクールリーダー研修

附属校教育研究・研修センター

6 月 30 日(土) 朱雀キャンパスにおいて、第 1 回スクールリーダー研修を実施した。

講師として静岡大学大学院教育学研究科 教授 武井敦史先生を迎え「新時代のスクール・リーダーシップ ―学校と教員のこれからを考えよう―」をテーマとして実施した。途中、先生からの問いかけやDVDを見て、受講者同士の意見交流を交えながらマネジメントと「場」を生かすリーダーシップについて考える研修となった。参加者は 13 名（立命館長岡京 5 名、立命館慶祥 1 名、立命館守山 2 名、一貫教育部 5 名）だった。

《研修内容》

研修はパワーポイントを中心に下記のように行われた。

① 教員人生の今までとこれから

教員は他の職種に比べて「仕事が楽しい、働き甲斐がある。」と回答する人は多いが、年齢に高くなるにつれて特に男性教員のやりがい感は下がっていく。理由は、授業も慣れて惰性に陥り、自分でキャリアを切り開いていかないとやる気のないものになっているのではと先生は話された。そして、明治以降の学校教育は、国家の拡大・発展もしくは個人の立身・成功を前提に成立・発展していった。つまり、子どもは国または自分が豊かになるために勉強していた。しかし、これからは人口減少、縮小化の中で教育の意味を見つけていかないといけない状況になっている。



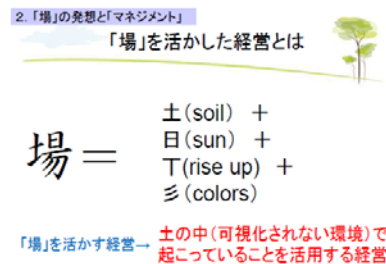
② ビル・ゲイツとスティーブ・ジョブズのメンタルモデルの比較

DVDを一部分見て、二人の考え方の違いについて受講者間で話し合った。1人は環境分析を行い、目標設定してPDCAサイクルで課題解決を図る。もう1人の考えは当初挫折であったかもしれないが、今振り返ると挫折は人生に新たな展開を生むきっかけになり、新たな飛躍につながり今の成功を獲得したというものである。後者の考えは生きる希望は理想の彼方にあるのではなく生活のいたるところ存在するというものであった。

③ 「場」の発想と「マネジメント」

人生を豊かにする可能性を持つ偶然が存在するイメージを先生は「場」という言葉で表現された。「場」という文字を分解すると「土」は土、「日」は太陽、「T」は上がるという意味の記号、「ノノ」は彩りを意味している。つまり、太陽が昇って大地が彩りを放つとき、そこが「場」と呼ばれる。「場」には様々な可能性が存在し、それ自体生きている環境空間である。

「場」には4つの性質がある。一つ目は能動性である。つまり、「場」と個人は相互作用をしながら変化している。二つ目は暗在性である。「場」は我々の知らない部分を含み動いているという事である。三つ目は「場」の複層製である。「場」は複合的・重層的につながっている。ある子どもはクラスの場の中に、クラスは学年の場に、学年は学校の場に存在する。また、生徒は活動の中身や時間によ



って、学校や地域、塾といったいくつもの場に存在しているということである。四つ目は「身体性」である。「場」から発せられる情報は見たり、聞いたり、嗅いだり、触れたりと五感全てによって伝えられる。

④ 学校の光景は違って見える！

カルティベート感覚とは、場に働きかけることで、これを活性化して、そこから生まれる芽を利用することでよりよい現実の姿を引き出していこうとする意識である。一方、目標を設定し計画的・組織的にこれを達成していく意識はマネジメント感覚という。今日、両者の望ましい関係作りが必要とされている。

幾つかの誤解を紹介いただいた。「目標を浸透させる。」と言われるが学校教育目標は抽象的で多義的表現となる。一方、日々の教育活動は個別的で具体的なものである。目標は活動の中で意味づけを繰り返す中で実質化されるものである。「バランスの取れた教員育成」と言われるが、全員が粒ぞろいより不ぞろいなチームの方が大きな力を出す可能性があるのではないか。

「職員一丸となって改革に励む」と言われるが、やる気のある人を集め、支援の風を送ればやがて全体に火が回るのではないかと（七輪の法則）といった内容であった。

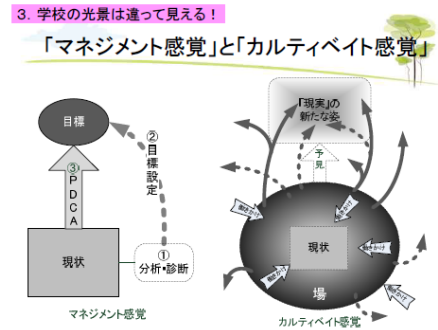
⑤ 「場」を生かすリーダーシップ

マネジメントは組織を円滑に動かしていく手法で、リーダーシップは現状を変えていく手法である。

リーダーシップで、学校の場にいきなり学校外から即効性の強い手法が静岡県で持ち込まれた事案を紹介いただいた。2013年学力テストの成績が全国最下位となり、急激なこ入れが行われた事案である。結果、成績は向上したが、一方では因果関係は明確でないが、不登校児童・生徒の増加、精神疾患による女性教員（20歳台）の増加という現象が現れたというものである。学校を変えていくとき、大鉈を振るう必要もあるが、余りに場を考えないものであれば、弊害が生まれてくるのではないかと先生は話された。

最後に、ビジョンに固執すれば、場の活きを失い、ビジョンがなければ場に支配される。場と対話しながら同時並行でビジョンを作る大切さをお話いただき、研修を終わった。

（文責 教育研究・研修センター 羽田 澄）



3. 学校の光景は違って見える！

よくある誤解(4) 「職員一丸となって改革にはげむ」

